《論文》

# ベルベルの政治権力とマグリブ出身のウラマー

## ―ムラービト朝初期における協力関係

野口　舞子

### 一．ムラービト朝とウラマー

ムラービト朝（一〇六一―一一四七年）は、マーリク派法学を採用し、マグリブ地域（アルジェリア西部以西）のスンナ派によるイスラーム化を促したと評価される。[1] これは、王朝の起源が、マーリク派法学者によって率いられたサハラ砂漠西部のサンハージャ系ベルベルのムラービト運動と呼ばれる宗教運動にあること、また王朝下でウラマー（知識人）、とりわけ法学者が重用され、彼らが政治的にも大きな影響力をもったことによる。君主は法学者の意見をもって諸事をなし、カーディー（裁判官）をはじめとする司法行政に登用した。

ここでいうウラマーや法学者は、当時学問の先進地域であったアンダルスの出身者が想定されてきた。[2] この時期、アンダルスから後世に名を残すような法学者が輩出したことに加え、伝記集が系統だって編纂されたことから、組織的なウラマー研究が行われ多くの成果が出された。[3] こうしてムラービト朝研究ではアンダルス出身のウラマーに関する議論が多くを占め、その役割が強調されてきたのである。他方で、マグリブ出身のウラマーについては、ムラービト運動の指導者ア

ブド・アッラーフ・ブン・ヤースィーン ʿAbd Allāh b. Yāsīn al-Jazūlī（以下、イブン・ヤースィーン）らいくつかの例外を除き、具体的な議論がされることはほとんどなかった。[4]

しかし、宗教指導者の没後（一〇五九年）からムラービト朝による一〇八六年のアンダルス進出までは二〇―三〇年の隔たりがある。この時期は、ユースフ・ブン・ターシュフィーン Yūsuf b. Tāshfīn（位一〇六一―一一〇六年）によってマグリブの征服と支配が進んだ、王朝の形成期に相当する。このころ王朝がどのように支配を行い、マグリブ出身のウラマーとどのような関係をもったのかという点を検討することは、通時的な王朝の支配のあり方やウラマーとの関係を考える上で、欠かすことができない。このため本稿では、マグリブ出身のウラマーに焦点を当て、ムラービト運動からユースフ・ブン・ターシュフィーン期のベルベルの政治権力との関係を検討し、ウラマーの役割とその変化を明らかにする。なお、本稿では、ウラマーを出身地（アラビア語では min ahl として表現される）によって区分して議論することとし、マグリブ出身、アンダルス出身、イフリーキヤ（現チュニジア地域周辺）出身、およびその他の地域出身の四つに分類した。

史料は、第一にウラマーやスーフィー・聖者の伝記集を用いた。なかでも、ムラービト朝後期に活躍した法学者イヤード ʿIyāḍ b. Mūsā（一一四九年没）の『マーリク派の偉人を知るための知識の整序と理解の近道 *Tartīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-maʿrifat aʿlām madhhab Mālik*（以下、*Tartīb*）』はマグリブで著された最初の伝記集といえる。当該伝記集はイスラーム世界全域のマーリク派法学者を対象としており、学祖マーリクとその仲間からイヤードの時代までを世代（tabaqa）順に収録する。法学者の学問修得だけでなく、政治・社会的な事象についても独自の情報を多く伝える貴重な史料である。次に、イブン・バシュクワール Ibn Bashkwāl（一一八三年没）の『繋がり *al-Ṣila*』とイブン・アルアッバール Ibn al-Abbār（一二六〇年没）の『繋がりの補遺 *al-Takmila li-kitāb al-ṣila*（以下、*Takmila*）』の二つを使用した。これらはともにアンダルスのウラマー伝記集であり、『繋がり』がイブン・アルファラディー Ibn al-Faraḍī（一〇一二年没）の

『アンダルスのウラマーと知識伝承者の歴史 *Ta'rīkh al-'ulamā' wa-l-ruwāt li-l-'ilm bi-l-Andalus*』の続編として書かれ、『繋がりの補遺』は『繋がり』の続編として書かれたものである。この他に年代記や地理書を参照したが、年代記は同時代史料が散逸しているため、ムワッヒド朝（一一三〇―一二六九年）以降に著されたものとなる。なお、地理的な区分として本稿でマグリブと用いた場合は、アルジェリア西部より西の地域で、南縁は現在のモロッコの南縁とほぼ同じ地域とする。

## 二．ムラービト運動

### （一）ムラービト運動以前のマグリブの政治と信仰

ムラービト運動について検討するまえに、運動が始まる一一世紀前半までのマグリブの政治および信仰の状況をみておく必要がある。[5] まず、七世紀後半に始まるアラブの征服以降、八世紀末に出自はシーア派だが教義はスンナ派に近いイドリース朝（七八九―九二六年）がフェスを中心に成立した。その後、フェスはアンダルスの後ウマイヤ朝（七五六―一〇三一年）の介入を受け、ザナータ系ベルベルのマグラーワ族が同王朝の宗主権を認めつつ支配をおこなった。他方で、タンジェ周辺や北西部のセブー川流域ではハワーリジュ派に与しマシュリクから亡命してきたアラブ人が、在地のベルベル人と結託して勢力をもった。マグリブ南部に関しては、ミドラール族（七五七―九七六・七年）がオアシス都市シジルマーサに拠点をおき、交易を経済基盤として栄えた。ミドラール族はハワーリジュ派の中道派（スフリ派）をいだいており、その後、シジルマーサもザナータ系ベルベルのマグラーワ族によって支配されたが、スフリ派の信仰はムラービト運動によって征服されるまで保たれたと考えられている。

先住のベルベル部族であるバルガワータ族やグマーラ族からも、宗教運動と呼ばれる独自の動きが興った。大西洋岸のターマスナー地方では、マスムーダ系ベルベルのバルガワータ族によってベルベル語のクルアーンが作成された。運動の

創始者は自らを預言者と主張し、マフディー（神意により正しく導かれた者の意）思想を説いた。バルガワータ族は教義・祭式の面でイスラームの導入を行う一方、唾液の効能などの呪術的な信仰も守り、八世紀半ばから一一世紀末のムラービト朝による征服までこうした信仰を続けたと考えられている。北部のリーフ地方でも、マスムーダ系ベルベルのグマーラ族によって、イスラームの教えに魔術・呪術を加えた信仰が採られた。また、タールーダーントを中心とするース地方には、バジャーリーヤというシーア派小集団がいた。[6] このように、ムラービト朝征服以前のマグリブは、イフリーキヤのファーティマ朝とアンダルスの後ウマイヤ朝に挟まれ双方の勢力からの介入をうけたが、両王朝の弱体化に伴い土着のベルベルが頭角を現し、各地に勢力が形成される状況であったといえよう。さらに、正統（スンナ派）とは言いがたいイスラームと土着の信仰をもつ集団がマグリブの至るところに存在していた。他方で、同地域のイスラーム化とともに、一〇世紀後半以降、マーリク派法学の教えも徐々に拡がっていったと考えられている。[7]

### （二）宗教指導者イブン・ヤースィーン

サハラ砂漠西部でラクダの遊牧を生業としていたサンハージャ系ベルベル諸部族による宗教運動、すなわちムラービト運動の興りは次のようにまとめられる。サンハージャ系ベルベル諸部族の長であったグダーラ（またはジュッダーラ）族のヤフヤー・ブン・イブラーヒーム Yahyā b. Ibrāhīm（一〇四八年頃没）は、メッカ巡礼に出かけ、その帰途、イフリーキヤのカイラワーンに立ち寄った。カイラワーンは、アグラブ朝（八〇〇―九〇九年）下で首都となり、政治・宗教の中心地として繁栄し、さらにサフヌーン Saḥnūn, ʻAbd al-Salām al-Tanūkhī（八五五年没）によってマーリク派法学の基礎が築かれて以来、伝統的に同派の拠点となっていた。ヤフヤー・ブン・イブラーヒームは、この地で指導的な役割を果たしていたマーリク派法学者、アブー・イムラーン・アルファースィー Abū ʻImrān al-Fāsī（一〇三九年没）と出会い（一〇三五・六年頃）、自らの部族民を教化しうる者の紹介を望んだ。[8] しかし、カイラワーンではヤフヤー・ブン・イブラーヒー

ムに同行できる者が見つからなかったため、ヤフヤー・ブン・イブラーヒームはアブー・イムラーン・アルファースィーの紹介でモロッコ南部のナフィースでワージャージュ・ブン・ズッルー Wājāj/Wajjāj b. Zllū al-Lamṭī[9] という法学者に面会した。ワージャージュも、アブー・イムラーン・アルファースィーの弟子であり、このワージャージュ・ブン・ズッルーを介してその弟子のイブン・ヤースィーンを宗教的な指導者として部族に招くことになった。

イブン・ヤースィーンはベルベル諸部族のもとへ至ると自らの教えの遵守を求めた。その内容は、財の配分や、イスラームの教えに基づく様々な罰則に関するものだった[10]。彼に従った者たちをムラービトゥーン（murābiṭūn リバート（修道場もしくは砦）に集う者）という[11]。イブン・ヤースィーンは第一節で述べたような信仰をもつベルベル部族を多神教徒（mushrik）または不信仰者（kāfir）であると見なし、イスラームを受け入れるよう説き、受け入れない者にはジハードを行い、服従する者を増やしていった。こうした教化・征服活動によって、サンハージャ系のラムトゥーナ族、グダーラ族、マッスーファ族などがイブン・ヤースィーンに服従し、ムラービトゥーンを構成する主要な部族となった。一〇五四・五年にはザナータ系マグラーワ族のマスウード・ブン・ワーヌーディーン Mas‘ūd b. Wānūdīn/Wānnūdīn の支配下にあったシジルマーサやダルア地方を征服した[12]。その後、イブン・ヤースィーンはバルガワータ族の討伐に向かい、その戦いの中で没した（一〇五九年）。

イブン・ヤースィーンは宗教的、精神的な指導者だったばかりでなく、政治的な指導者としてもリーダーシップを発揮した。具体的には、征服する部族や都市を指示するだけでなく、ムラービトゥーンを構成するベルベル諸部族の中から長を指名するなど、没するまで絶対的な権力を持った。ベルベル諸部族の長との関係では、グダーラ族のヤフヤー・ブン・イブラーヒームの後、ラムトゥーナ族のヤフヤー・ブン・ウマル Yahyā b ‘Umar と行動を共にして上述のシジルマーサとダルアの征服を行い、一〇五六年頃にヤフヤー・ブン・ウマルが遠征中に死去すると、その兄弟のアブー・バクル Abū Bakr b. ‘Umar（ベルベル諸部族の長の地位：一〇五六―七二年頃?、一〇八七年没）をベルベル諸部族の長に指名した。

ヤフヤー・ブン・ウマルとアブー・バクル・ブン・ウマルの指名をもって、二人の出身部族であるラムトゥーナ族がムラービトゥーンの中で優位を確立した。こうしたイブン・ヤースィーンの姿は、命令と禁止を指示する真の指揮官（amīr）、共同体の指導者（imām）として表現された。[13]

### （三）イブン・ヤースィーンの後継者

強大な権力をもったイブン・ヤースィーンの後継者の問題は、ムラービト朝のウラマーの役割を検討するうえで重要である。これまで、王朝史では彼の後継者としてスライマーン・ブン・アザーラー Sulaymān b. ʻAdhārā’ とムラーディー al-Murādī, Muḥammad b. al-Ḥasan al-Ḥadramī の二人が考えられ、議論されてきた。本節ではこの二人とその学統について検討し、宗教指導者とムラービトゥーンの権力関係を明らかにしたい。

後継者の検討に入る前に、イブン・ヤースィーンの学問修得や師弟関係を確認しておく。彼の師には上述のワージャージュ・ブン・ズッルーが挙げられ、仲間と共にスース地方で活動していた。イブン・ヤースィーンはアンダルスへ渡り、七年もの滞在で多くの知識を得たとされるが、具体的な学問や滞在地、師弟は明らかでない。仲間および弟子に関しては、イブン・ヤースィーンがグダーラ族のところにやってきた当初、七〇人ほどの法学者が彼のもとに集まったという記述もあるが、これらの者が具体的にどのような者だったかは明らかでない。[14] 同様に、シジルマーサとダルアの征服に際しても、同地の法学者および信仰正しき者（ṣulaḥā’）がイブン・ヤースィーンに教化を望んだことが確認できるが、彼らの詳細も不明であり、シジルマーサ征服後にこれらの者がムラービトゥーンの中で何らかの役割を果たしたのかも不明である。[15]

第一の後継者、スライマーン・ブン・アザーラー（一〇六〇・一年没）[16] については、*Tarīb* にイブン・ヤースィーンの没後の、ムラービトゥーンの大事の指導者（al-qā’im bi-amr al-murabiṭīn）という記述がある。ただし、この記述は兄弟ア

ブー・アルカースィムの伝記記事に書かれており、スライマーンについて独立した項目が立てられているわけではない。二人の出身地は記されておらず、兄弟アブー・アルカースィムはイブン・ヤースィーンの師であるワージャージュの仲間（aṣḥāb）の一人とあるが、二人に関してその他の情報は全くなく、スライマーンが指導者としてどのようなことを行ったのかはわからない。そして、このスライマーンもイブン・ヤースィーンの没後しばらくして没している。したがって、スライマーンの師弟も不明であり、彼の後継者はいないと思われる。

二人目のムラーディー（一〇九六年没）[17]は、イマーム・ハドラミーとしても知られる。彼はイフリーキヤのカイラワーン出身で法学、神学（アシュアリー派）を修め、マラケシュ近郊のアグマートに住んだ。ムラーディーはベルベル諸部族の長であるアブー・バクル・ブン・ウマルに従ってマグリブのサハラへ向かい、アズキー（Azkī または Azūgī、現モーリタニア）の裁判官に指名され、同地で没した。彼はまた、君主鑑を著しアブー・バクルに献呈したとされている。[18]師はアブー・マルワーン・ブン・シラージュ Abū Marwān b. Sirāj とアブド・アッラフマーン・ブン・ウマル ʻAbd al-Raḥmān b. ʻUmar al-Tamīmī が挙げられている。一〇九四年にアンダルスのコルドバに来たとあるので、アブー・バクルの没後にアンダルスに来てサハラに戻ったことになる。ムラーディーに関しては、イブン・ヤースィーンと師弟関係があったわけではなく、ベルベル諸部族の長のアブー・バクルとの関係から指導的立場を得たととらえられている。[19]しかし、史料からはムラーディーがイブン・ヤースィーンのような指導者であったという記述はない。彼の弟子の伝記記事では、信仰の諸学問（ʻulūm al-ʻiʻtiqādāt、神学）をマグリブ・アクサー（モロッコ地域）に最初に導入した者だと述べられており、イマームという彼の称号も、学問の導師という意味であり、共同体の指導者という意味ではない。ムラーディーはアブー・バクルに任命されたカーディーであり、君主鑑を著していることからも、その立場は助言者としてのものだといえ、両者の上下関係は明らかだと考えられる。

なお、ムラーディーには少なくとも五人の弟子と一名の息子が確認できるが、彼らもまたイブン・ヤースィーンのよう

な指導者としては描かれていない。弟子の一人、ユースフ・ブン・ムーサー Yūsuf b. Mūsā al-Kalbī（一一二六年没）は、アンダルスのサラゴーサ出身で、マラケシュに住んだアシュアリー派神学者、聖者（walī）である。[20]「ムラーディーから信仰の諸学問を学んだ最後のマグリブのイマーム（導師）」とされる。信仰の諸学問は史料によっては「唯一神と諸信仰の学問（ʿilm al-tawḥīd wa al- iʿtiqādāt）」ともされるが、結局のところ神学を修めたということである。彼の伝記で興味深いのは、君主との関係で、支配者（ムラービト朝君主のアリー・ブン・ユースフ）が財（māl）を贈ったが、それを貧しい人びと（masākīn）に分け与えたとされているところである。これは、聖者としての美徳を表現したものであり、この出来事の前に君主とどのような関係にあったか不明だが、権力と距離をおいているのは明らかだろう。他方で、ムラーディーの息子イブン・アルムラーディー ʿAlī b. Muḥammad b. al-Murādī al-Ḥaḍramī（一一四五年頃没）は、グラナダに住んだ法学者、ハディース学者である。[21]イブン・アルムラーディーはある地方（グラナダ地域か）のカーディーに任命されているが、この記述は一般的な地方のカーディーと何ら変わらない。

ムラーディーをイブン・ヤースィーンの後継者をと見なす理由は、ベルベル諸部族の長との近しさによる。しかし、ムラーディーの役割はカーディー、助言者あり、宗教指導者としてのイブン・ヤースィーンのあり方とは全く異なる。さらに、彼の役割で強調されるアシュアリー派神学者としての側面は、学統を継いだ弟子にいたっては聖者と見なされ、それゆえ政治的な権力とは逆の志向をもつ。以上がイブン・ヤースィーンの後継者の状況であり、彼と同様の役割を果たした者はスライマーン・ブン・アザーラーの没後、一〇六〇年以降は途絶えたといえよう。そして、この時期は、ベルベル諸部族の長アブー・バクルと従兄弟ユースフ・ブン・ターシュフィーンがムラービトゥーンを指揮して各地を征服し、マグリブで支配権を確立する時代に一致するのである。

## 三．ムラービト朝権力とマグリブ出身のウラマー

### （一）ユースフ・ブン・ターシュフィーンによるマグリブの征服

他方で、ベルベル諸部族の長の地位は、イブン・ヤースィーンの指名によってラムトゥーナ族のヤフヤー・ブン・ウマルからその兄弟のアブー・バクルに引き継がれた。アブー・バクルはイブン・ヤースィーン存命中にマグリブ南部を征服し、アグマートやターマスナー地方のマスムーダ族が支配下に入った[22]。こうした征服活動はイブン・ヤースィーンの没後も続き、アブー・バクルは従兄弟のユースフ・ブン・ターシュフィーンとともに軍を率いるようになった。その後、アブー・バクルは一〇七一年にはサハラ遠征に向かうためにユースフ・ブン・ターシュフィーンを自身の代理としてマグリブの支配を委任したが、翌七二年にはマグリブ支配を委譲し、自らはサハラに去った[23]。なお、イブン・ヤースィーンの後継者の一人と目され、アズキーのカーディーとなったムラーディーは、このときアブー・バクルに従いサハラに向かったと考えることができる。

ユースフ・ブン・ターシュフィーンはアブー・バクルによって支配を委任される以前から軍を率いてマグリブ遠征を行っていたが、一〇七一年以降、本格的にマグリブの中部・北部地域に進出した[24]。一〇七三年には配下のマズダリー Mazdalī b. Bānlūnkā を派遣してサレを平和裡に征服し、ヤティー・ブン・イスマーイール Yatī b. Ismāʿīl 指揮の軍をメクネスに送った。ヤティー・ブン・イスマーイールは戦いの前に使者（raqqās）を送り、同地のザナータ族の支配者ハイル・ブン・ハザル al-Khayr b. Khazar al-Zanātī も戦いを行うことなく支配下に入った[25]。その後、一〇七五年に従兄弟ヤフヤー・ブン・ワースィーヌワー Yahyā b. Wāsīnuwā/Wāsīnū をフェスに送ると、同地の征服では激しい戦闘を行うこととなり、多くの死者が出た。当時、フェスはマグラーワ族のハマーマ Ḥamāma の子のフトゥーフ al-Futūḥ とドゥーナース Dūnās によって支配されていたが、この征服によって二人も廃された[26]。この戦いののち、ユースフ・ブン・ターシュフィーンは同地の改造を行い、それまで別々に存在したカラウィーイーン地区とアンダルス地区が統合されたほか、モスクやハンマー

ム、隊商宿や製粉所も増設され、スークの改修も行われた。[27]

同じく一〇七五年には、従兄弟のマズダリーが、今度はトレムセンに派遣された。トレムセンはザナータ族のアッバース・ブン・ヤフヤー al-ʿAbbās b. Yaḥyā al-Zanātī が支配していたが、ユースフの書簡が届けられるとアッバース・ブン・ヤフヤーは退いたため、マズダリーは平和理にトレムセンに入った。マズダリーは息子ヤフヤーを同地に残してアッバース・ブン・ヤフヤーと共にマラケシュに戻り、アッバース・ブン・ヤフヤーはユースフの厚遇を受けてトレムセンに帰っている。[28] また、一〇七六・七年には、ユースフ・ブン・ターシュフィーンとタザの支配者アブー・ヤアラー Abū Yaʿlā との間に激しい戦いが行われた。ただし、ここでは、ユースフ・ブン・ターシュフィーンは敗退している。[29]

マグリブの北西部の征服に関しては、一〇七七・八年にセウタとタンジェの戦いのためにサーリフ・ブン・イムラーン Ṣāliḥ b. ʿImrān 指揮のもと大軍が派遣された。タンジェは当時、宰相（ḥājib）のスクート・アルバルガワーティー Sukūt al-Barghawāṭī によって支配されていたが、この戦いによってスクートは殺され、ムラービト軍がタンジェに入った。セウタには、スクートの息子ディヤー・アッダウラ Ḍiyāʾ al-Dawla Yaḥyā b. Sukūt が残った。[30] セウタの征服はタンジェ征服から少し経て、アンダルスでキリスト教徒側にトレードが陥落する二年前の一〇八三年と考えられている。[31]

こうしたマグリブ各地の征服とともに、ユースフ・ブン・ターシュフィーンは行政制度を整えていった。一〇七一・二年にダール・アッシッカ（造幣所）をマラケシュに建設し、貨幣を発行している。[32] 一〇七四・五年にはマグリブ地域を四分し、それぞれに総督（wālī）を任命した。[33] また、トレムセン征服後の一〇七七・八年に軍を再編し、支配下の地域に服従を確認している。[34] これらはマグリブ北部の主要都市の征服後、広大な領土の行政制度を整え、各地の状況を見直す必要が生じたためであろう。このころにはムラービトゥーンという名称は、主にサンハージャ系部族から成る軍事集団としての意味合いをもつようになっている。司法行政については後節で改めて検討するが、各地の征服直後よりカーディーの任免が確認され、政治・軍事行政と同様に初期から制度が整えられていったと考えられる。

## （二）マグリブ出身のウラマー

ベルベルの政治権力とウラマーの関係を検討する前に、「一般的な」ウラマーの学問状況や活動を概観しておきたい。本節では、ユースフ・ブン・ターシュフィーン期（位一〇六一―一一〇六年）の前後のマグリブ出身のウラマーの活動と役割を検討するため、ウラマーの没年がヒジュラ暦四五五―五〇五年（西暦一〇六三―一一一二年）である者と、これ以外で明からにユースフ・ブン・ターシュフィーンとの関わりがあったと思われる者を抽出した。以上のような条件で、独立の項目として記載された者を抽出したところ、三六名が確認できた（表一）[35]。なお、*Tarīb* において、全世代（学祖マーリクの時代からイヤードの時代の一二世紀前半）、全ての伝記記事を分類すると、マグリブ出身者は七〇名程度である。他方で、アンダルス出身者は八〇〇人弱とマグリブの一〇倍以上、イフリーキヤ出身者は三五〇人強で五倍のウラマーが採録されている。マグリブ出身者の数は他の地域出身者と比べれば多くはないが、具体的なウラマーの情報は非常に貴重である[36]。伝記集における情報に関しては、谷口淳一が①名前②生没情報③学問分野・人物評価④学歴・師弟関係⑤職歴⑥著作一覧としている[37]。本稿で扱う伝記記事についてもほぼ同様の分類が可能であり、表一では各ウラマーの記事を①名前②没年③出身④役職⑤師の数⑥弟子の数⑦修得した学問⑧旅（マグリブ以外の滞在）⑨逸話・支配者との関係⑩史料（出典）に分類した。以下で各項目についてみてみる。

まず、ウラマーの出身地については、六四％をセウタが占める（二三人）。これは、*Tarīb* の作者イヤードの出身地であることから、同地への関心が高く、記述も詳細なものとなったということができる。他方で、ウラマー輩出地としてのセウタの学問水準の高さも示しているといえる。出身地として次に挙げられるのは、フェスである（五人、一四％）。既知の通り、フェスはモロッコにおける最初の王朝であるイドリース朝の都として、七八九年に建設され、学問、文化および商工業の中心都市として発展した。この他に、タンジェ、サレ、ウジュダといった都市と、部族名からマグリブ出身者

と判断できる者が残りの二二％となる。なお、イブン・ヤースィーンの時代より後は、シジルマーサやダルア地方などのマグリブ南部、サハラ地域といったムラービト運動揺籃の地を出身とするウラマーは見あたらない。これらの地域のウラマーについては、伝記集の独立した項目でなく他のウラマーの師弟関係の中でわずかに見ることができるが、詳細は殆ど不明である。これらの地域はマーリク派のネットワークに統合されなかったという指摘もある。[38] いずれにしても、ウラマーの出身地はマグリブの中部から北部の当時を代表する都市に集中している。また、伝記集では、都市名家の出身者が記録されると言われているが、[39] 本稿で抽出したマグリブ出身者に関しても、学問だけでなく政治的、社会的にも著名な家系の出身であることが度々記される。例えば、タンジェとセウタで影響力を持ったマルワーン・ブン・アブド・アルマリクの家系は一大家系を形成しており、マルワーンとその息子四名、甥と甥の息子の計八名が各地のカーディーを歴任した（表一、no.22, 36、以下同）。

ウラマーの学問修得に関しては、法学が最も多くのウラマーによって学ばれた（六七％、二四人）。続いて、ハディース学が半数で（五〇％、一八人）、クルアーン諸学が続く（読誦学含む、二二％、八人）。これらはウラマーにとっては基本的な学問といえ、伝記集に現れた記述は特記事項として記された可能性も高いが、その他の学問への言及はあまりなく、マグリブ出身者にとってはこれらが中心的な学問であったのも確かである。[40] 加えて、この時代はマグリブにおけるスーフィズムの興隆の時代として考えられている。マグリブの初期のスーフィーにおいて最も重要な者は法学者であるとされ、[41] 表一からもウラマーでありつつ、スーフィー（no.29）や聖者（ṣāliḥ, walī）（no.31, 33）と記される者がみられる。

師弟関係では、師の数は平均して二・六人、弟子の数は半分の一・二人が記載されている。これと関係して、他地域への学問の旅（riḥla）は七五％の者（二七人）が行っており、知識を求めて移動を行っていたことは明らかである。半数の一八人がアンダルスへ渡っており、同地との距離や関係の近さを示すとともに、アンダルスの学問の先進性を示す。

これらのウラマーの活動場所は、モスク周辺や自宅だったことがわかる。彼らは、マジュリス（majlis 集会）や車座

(halqa) を開催し、そこで教授や学習を行った。[42] 例えば、カーディーのムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ (no.35) は、自身の家でファトワー (法的見解) の発行と教授を行っていた。また、裁判を職務とするカーディーもモスクで業務を行っていたと考えられる。これらのウラマーが生活にかかる費用をどのようにまかなっていたのかについては不明な点が多いものの、後代のアンダルスではクルアーンの教授に際し、謝礼 (ujra) も贈り物 (hadīya) も受け取らなかったということが美徳として書かれる者もおり、こうした講義等で生活費を得ることができたとみられる。[43]

### (三) ムラービト朝初期の司法行政

ムラービト朝君主はマーリク派法学者の意見を取り入れ、彼らを司法行政に積極的に取り込んだことが知られている。なかでもアンダルスの法学者の多くが司法行政に携わっていたことははじめに述べた通りである。エルフール El Hour は、ムラービト朝期のアンダルスの司法行政従事者について、カーディーやムフティー (ファトワーを出す法学者)、ムシャーワル (mushāwar カーディーのシューラーで諮問される法律顧問)、サーヒブ・アルアフカーム (ṣāḥib al-aḥkām 次席裁判官) らを示した。ムラービト朝期のアンダルスの司法行政は、既存の制度を踏襲しつつ、行政職の名称の変化や改革が行われたことが認められるという。[44]

アンダルス征服に先立つマグリブにおいても、カーディー、ムフティー、アフカーム、また説教師や礼拝の導師といった職がムラービト朝征服以前に存在した。王朝はこうした職を継承するとともに、広範な地域を支配したことで、初期から司法行政を整えていったと考えられる。なかでも多くの者がカーディーに就いたことがわかり、三九%(一四人)が数えられる。カーディーの就任地としては、マグリブでマラケシュ、メクネス、セウタ、フェス、タンジェ、サレが挙げられる。マグリブ出身者はアンダルスのカーディーへも就任しており、アルヘシーラス、バレンシア、グラナダが挙げられ、注目に値する。[45] また、セウタについては、カーディーに関しても情報が多く、バルガワータ族による支配の時代から

ムラービト朝後期まで歴代の就任者を再現することができる（表二）。なお、都マラケシュのカーディーはハドラ（Hadra御前）もしくはカーディー・アルジャマーア（大カーディー）とよばれた。他方で、マラケシュやアグマート以南のマグリブ南部からサハラ地域にかけての都市や地域へのカーディー就任は不明である。これは、前節で述べたように支配者の故地からウラマーが輩出していないばかりでなく、行政上の位置づけとしてもカーディーが就任するような都市ではなかったということになる。ホプキンス Hopkins はアンダルス式の司法行政制度は、セウタ、タンジェ、フェスを除いてアフリカには適用されなかったと述べ[46]、マグリブ地域の司法行政における南北の差を示唆しているが、本稿で明らかになったマブリブ出身者のカーディー就任地の分布も、マラケシュを除き同様の傾向を示す（地図参照）。

カーディーの就任者は、ムラービト朝征服以前のカーディーの再任や、複数都市への歴任、同一都市への再任といった、経験者を重用する傾向がみられる。これらのなかには、君主が人選に介入したり、自らで決定しようとする意思が見えるものもある。例えば、ムラービト朝がセウタを征服した際、ユースフ・ブン・ターシュフィーンはマルワーン・ブン・アブド・アルマリク（no.22）に対して、同地へのカーディー就任を打診した。マルワーンはこれを拒否し、代わりにムハンマド・ブン・アブド・アッラーフを挙げたところ、ユースフ・ブン・ターシュフィーンはムハンマドがバルガワータ族のもとでカーディーだったためこれを良しとしなかった。また、ユースフ・ブン・イーサー（no.23）も、ザナータ族の支配下でフェスのカーディーを務めていたが、フェス征服後、ユースフ・ブン・ターシュフィーンによってメクネスのカーディーに任命された。なお、先ほどのマルワーン・ブン・アブド・アルマリクのように、人選に関しては影響力のあるウラマー（もしくはカーディー）が適任者を推薦する場合もあった。これは、サハラ出身の君主にとって、マグリブ以北は縁故のない土地であり、在地の有力ウラマーに人選を頼らざるを得なかったと考えられる。また、ウラマーは自らの出身地のカーディー職に就くことが多く、一四人中一〇人はその傾向を示した。ムラービト朝征服以前の支配者のもとで地位のあった者の登用や経験者が複数回もしくは複数地域に重用される傾向からも、マグリブのカーディーは人材自

体がそれほど多くなく、在地勢力を承認する形だったといえよう。ただし、在地勢力を承認することで、その勢力を自らの権力下に取り込んでいたともいえる。[47]

カーディー以外の司法行政職としては、ムフティー、シューラーで諮問される者、アフカームがある。シューラーは諮問会議の意味で、各都市と君主のもとにあり、成員はそこで諮問され意見を述べた。マグリブのアフカームについて具体的な職掌は不明だが、アンダルスのサーヒブ・アルアフカームと同様に、カーディーの判決が遂行されているか監督したと考えられる。なお、ウラマーが関わる他の行政職について、書記（kātib）は文書行政を司る重要な役割を果たしたが、ユースフ・ブン・ターシュフィーン期、アリー・ブン・ユースフ期ともにアンダルス出身者のみが知られる。[48] 他にウラマーが従事する職務としては、説教師、モスクにおける導師、教授（mudarris）などがあった。なお、ユースフ・ブン・ターシュフィーンの事績に関しては、ウラマーを好み、意見を取り入れたということに加え、法学者、ウラマー、聖者（ṣāliḥ）に名誉を授け、国庫（bayt al-māl）から生活の糧（rizq）与えたとする史料もある。また、ムワッヒド朝期に年代記を著したマッラークシー‘Abd al-Wāḥid al-Marrākushī（一二二四年頃執筆）は、アリー・ブン・ユースフの事績を記述し、君主による法学者重用の結果、彼ら（法学者）の財（māl）が増え、利益（mukāsib）が拡がったと伝える。これらの利益を享受した者が、具体的にどのように司法行政に携わったのか、俸給の額や俸給を得る機会などの詳細も不明だが、業務を通じて俸給を得ていた可能性が高い。[49]

### （四）君主とウラマーの関係

ウラマーと君主との関係が最も多く記述されるのは裁判官であるカーディーの任免だが、それ以外にもウラマーは君主との関わりをもった。まず、君主が諮問を行う、もしくはウラマーが助言を行うという関係である。例えば、ムラービト軍は一〇九〇年以降、ムスリム治下のアンダルスの征服を行った。[50] その際、ユースフはフェス出身のユースフ・ブン・

イーサー（no.23）とカイラワーン出身のイブン・サアドゥーン Muḥammad b. Saʿdūn al-Qarawī の助言に従い、アンダルスの諸王を廃位したり、留任させたという。[51] 実際に、グラナダ、セビーリャ、コルドバといったアンダルスの主要地域を支配していた王が次々に廃位され、グラナダ王アブド・アッラーフ ʿAbd Allāh b. Būluggīn al-Zīrī、セビーリャ王ムウタミド al-Muʿtamid, Muḥammad b. ʿAbbād はアグマートへ、グラナダ王の兄弟でマラガ王タミーム Tamīm b. Būluggīn al-Zīrī はスース地方に送られた。この他、マルワーン・ブン・アブド・アルマリク（no.22）については、アンダルスとマグリブの諸事は全て彼のもとに持ち込まれ、ユースフ・ブン・ターシュフィーンがその大事について彼に委任したという。また、ユースフ・ブン・ターシュフィーンはマグリブ・アンダルスの支配に対しアッバース朝カリフの承認を求めたが、セウタ出身のアティーク・ブン・イムラーン（no.19）は東方に赴いた際アッバース朝カリフ、ムクタディー（位一〇七五―九四）のユースフへの書簡を持ち帰ったという。[52] 君主に助言や献策を行う者としては、これまでもっぱらアンダルス出身者が言及されてきたが、マグリブ側にも同様の者がいたことは注目に値する。

君主とウラマーの関係では、従軍するウラマーの存在も挙げることができる。ウラマーの従軍はムラービト朝以前でも確認できることではあるが、他方でジハードを旗印の一つとしていたムラービト朝にとっては重要な存在だったに違いない。従軍の例としては、一〇八六年、ユースフ・ブン・ターシュフィーンが自ら軍を率いてアンダルスに渡り、イベリア半島北方のキリスト教国カスティーリャ＝レオンのアルフォンソ六世（レオン王位一〇六五―一一〇九年、カスティーリャ王位一〇七二―一一〇九年）軍をバダホス近郊で撃破したザッラーカの戦いがある。この戦いには、アブド・アルマリク・アルマスムーディーやヤアラー・ブン・アルマスムーディーが従軍し殉教した（no.14, 15）。[53] 他にも、ユースフ・ブン・イーサー（no.23）がユースフと共にアンダルスに遠征を行っており、アブド・アッラーフ・ブン・アリーはグラナダのカーディー在任中に、アリー・ブン・ユースフが親征を行ったタラベーラの戦いに従軍した（no.36）。これらは皆カーディー経験者である。こうしたウラマーの従軍は王朝の戦いを正当化し、他のウラマーや一般の人びとにも周知させ

るのに一役買っていたといえる。

以上のような政治権力とウラマーの結びつきがあった一方で、権力から距離をおこうとするウラマーの姿も確認できる。上述のマルワーン・ブン・アブド・アルマリクは、セウタが征服された際にカーディー就任を求められたが、本人はこれを拒否し、二度にわたって別の者をカーディーに就けるようにユースフに助言している。彼は、最終的にタンジェのカーディーに就任しただけでなくユースフから諸事を委任された。しかし、理由は不明ながら、当初は権力と距離をとっていたといえる。なお、私市正年は、王朝のイデオロギーであるマーリク派法学は、この時代、従来の法解釈（タクリード）に従い学問的研究から遅れたことに対して、アシュアリー派神学やスーフィズムを修めた学者がこうした風潮を批判し、とくにフェスにおいてこの様な動きがあったと指摘する。[54] しかし、ユースフ・ブン・ターシュフィーン期はスーフィーの反体制的な活動は明らかでない。ムラービト朝権力とスーフィーとの関係が顕在化するのはアリー・ブン・ユースフ期のことであろう。

ムラービト朝君主とマグリブ出身のウラマーの直接的な関係は、カーディーの任免、相談と諮問、従軍などに現れる。こうした関係は、従来アンダルス出身の法学者との関係で議論されてきたものだが、ユースフ・ブン・ターシュフィーンとアンダルスの法学者との関係が築かれる前から、それもマグリブ征服直後から同地の出身者とも同様の関係が見いだせる。それでは、マグリブ出身のウラマーは何故ムラービト朝権力に与したのだろうか。宗教指導者であるイブン・ヤースィーンへは、その教えに対し法学者が集ったが、ベルベルの君主であるユースフ・ブン・ターシュフィーンをマグリブのウラマーが積極的に受け入れたことがわかるような明確な記述はない。ただし、アンダルスで王朝が人々から受け入れられたのは、その軍事力とイスラーム法にない税を廃止したからであり、税に関してはアンダルスに先立ちマグリブでも同様の政策を行っていた。[55] また、王朝はマグリブの在地勢力を承認し、ウラマーの意見を取り入れたことから、マグリブ出身のウラマーもこうした王朝の支配を基本的には受け入れたのだといえよう。

## （五）他地域出身のウラマーとの関係

ユースフ・ブン・ターシュフィーンはアンダルスの征服に際し、同地やイフリーキヤ出身のウラマーとも関係をもった。ここでは、イブン・サフルとイブン・サアドゥーンを例に、君主と他地域出身のウラマーとの関係をみてみたい。

イブン・サフル ʿĪsā b. Sahl al-Asdī（一〇九三年没）[56]は、グラナダ近郊のハエンに生まれ、法規定に関する著作『大法規 *al-Aḥkām al-kubrā*』で知られる、当時を代表するウラマーの一人である。他方で、ムラービト朝がアンダルスを征服する以前から親ムラービト朝の姿勢をとっていたことで知られる。[57]その生涯については、法学、クルアーンをコルドバ、ハエン、グラナダ、トレードで学び、学問を修めた後は、コルドバのシューラーの成員や同地の支配者（ḥākim）イブン・ジャリース Ibn Jarīs の書記として活動した。その後、理由は不明だがムラービト朝征服前のセウタに渡り、バルガワータ族の支配者のもとで名声を得、法学やクルアーンの教授を行った。さらに、マグリブのタンジェとメクネスのカーディーに任命された。その後グラナダに戻り、ムラービト朝による征服の前後二回同地のカーディーを務めた。グラナダ王アブド・アッラーフと、ムラービト朝君主ユースフ・ブン・ターシュフィーン双方と直接的な関係をもち、最期はグラナダで迎えた。

彼の師弟関係はより一層興味深い。師については、十二人が数えられ、うち十一人について伝記が明らかとなる。いずれも当時の著名なウラマーと見なせるが、特に、コルドバの偉大なムフティーとして知られるイブン・アッターブ Muḥammad b. ʿAttāb（一〇六九年没）[58]や、グラナダの名家クライイー家出身のイブン・アルクライイー Ibn al-Qulayʿī, Abū Zakarīyāʾ Yahyā b. Muḥammad al-Ghassānī（一〇五〇年没）[59]らは注目に値する。イブン・アッターブは高名であったが、[60]支配者との関わりを避け、コルドバでカーディー就任を求められたがこれを拒否している。また、イブン・アルクライイーも当時のグラナダにおける名士の一人であった。このイブン・アルクライイー（ヤフヤー・ブン・ムハンマド）と

グラナダ王アブド・アッラーフのもとでカーディーおよびワズィール（宰相）として仕えたイブン・アルクライイー Abū Ja‘far Aḥmad b. Khalaf al-Ghassānī（一一〇四・五年没）[61] は同じ家系であり、ワズィールのイブン・アルクライイーこそが親ムラービト朝の姿勢を取った者である。アフマド・ブン・ハラフ（イブン・アルクライイー）も、イブン・サフルと同様にイブン・アッターブとヤフヤー・ブン・ムハンマド（イブン・アルクライイー）から法学を学んでいる。ターイファ諸王権力と距離を置くイブン・アッターブや、ムラービト朝がアンダルス征服を行う契機を作った王の一人であるグラナダ王と近いクライイー家と関係を深めたイブン・サフルに、反ターイファ王という考えが醸成されたとしても不思議ではない。

イブン・サフルはマグリブを訪れた際にセウタで教授をつとめているが、八名の弟子のうち、六名がセウタ出身者である。なかでもムハンマド・ブン・イーサーやムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ（no.32, 35）といったユースフ・ブン・ターシュフィーン期にカーディーを務めた者や、イブラーヒーム・ブン・アフマド Ibrāhīm b. Aḥmad al-Baṣrī（一一一九年没、セウタとタンジェのカーディー）[62] やアブド・アッラーフ・ブン・マンスール ‘Abd Allāh b. Manṣūr（一一一九年没、セウタとマラケシュのカーディー）[63] といったアリー・ブン・ユースフ期にカーディーに就いた者などは、政治的・社会的にも影響力をもつ者たちであったといえる。イブン・サフルについて興味深いのは、彼が反ターイファ王の集団と、親ムラービト朝の集団の双方に接し、アンダルスとマグリブの両地域にまたがり学問的・政治的影響力をもっていたと考えられることである。そして、親ムラービト朝の立場によってムラービト朝征服後もグラナダのカーディーを務めたといえる。

次に、イブン・サアドゥーン Muḥammad b. Sa‘dūn al-Qarawī（一〇九二・三年没）[64] は、カイラワーン出身で、同地で学んだ後、メッカ巡礼を行い、メッカやエジプトでも学んだ。その後、商業に従事しながらマグリブとアンダルスを行き来し、アンダルス東部の各地で教授をつとめ、マグリブのアグマートで没した。彼も各地を旅したため、師は一九人、弟子

は九人を数える。なかでも特筆すべきは、ムラービト運動の契機を作ったカイラワーンの法学者アブー・イムラーン・アルファースィーに学んだ弟子の一人であったことである。アンダルスに移った後のイブン・サアドゥーンは、ターイファ時代の最も重要な法源学者とされている。[65] 他方で、既に述べたように君主ユースフ・ブン・ターシュフィーンは、このイブン・サアドゥーンとユースフ・ブン・イーサー（no.23）にアンダルス諸王の廃位等に関して助言を求めた。さらに、グラナダを征服する際にも、イブン・サアドゥーンはユースフ・ブン・ターシュフィーンにより同地に派遣され、グラナダ王と交渉を行っている。[66] イブン・サアドゥーンはムラービト朝のアンダルス征服においてきわめて重要な役割を果たした人物だったといえる。

イブン・サフルやイブン・サアドゥーンは共に当時を代表するウラマーであり、マグリブ、アンダルス、イフリーキヤ（ときにマシュリク）におよぶ活動範囲と師弟関係の広さがうかがえる。こうしたウラマーの姿は、一見すると学問領域の活動に完結しているようだが、当時のアンダルスの政治や社会の状況と付き合わせてみると彼らが王朝のもとで果たした役割も明らかになる。ムラービト朝のアンダルス征服は、マグリブ、アンダルス、そしてイフリーキヤ各地出身のウラマーのネットワークや協調関係にも支えられていたことがみえてくるのである。

## 四．結び

ムラービト運動は、宗教指導者イブン・ヤースィーンに率いられたムラービトゥーンによる宗教的な改革と征服活動であった。宗教指導者という存在は一〇六〇年頃には途絶え、その後サンハージャ系ベルベルの政治・軍事権力が確立した。他方で、ムラービト朝のマグリブ支配の初期からカーディーなどの任免によって司法行政の基礎が築かれ、王朝下のウラマーの役割も特定の傑出した指導者がムラービト集団を導くものから複数の者で行政を担う形に変化した。このとき

マグリブ出身者のカーディー職への任免は経験者を重用するものであり、王朝が在地勢力を承認する形だったといえる。とはいえ、マグリブ出身のウラマーは、司法行政以外でも助言や従軍などで君主と直接的な関係をもち、従来アンダルスの法学者について指摘されてきたような協力関係を築いた。本稿の検討を通じ、マグリブ出身のウラマー個々人の具体的な活動が明らかになり、ユースフ・ブン・ターシュフィーン期における著名なウラマーの存在も示すことができたと考える。また、こうした任免や在地勢力との関係あり方はアンダルス征服に先立ってみられることから、アンダルス支配にも援用された可能性が指摘できる。

なお、ユースフ・ブン・ターシュフィーンの後を継いだアリー・ブン・ユースフも父に倣い法学者を優遇し、この時期にアンダルス出身の法学者の優位が決定的となる。マグリブ出身のウラマーの数も増加する一方、反体制勢力も頭角を現すようになり、ムラービト朝の支配領域のウラマーの状況および王朝の支配構造には大きな変化が生じたと考えられる。本稿の結論を踏まえ、マグリブ、アンダルス、イフリーキヤといった全ての地域を含めたウラマーの、ムラービト朝における役割や位置づけを検討することがつぎの課題である。

## 史料及び略号一覧

（伝記集、著者名順）

*Marqaba* : al-Bunnāhī, ʻAlī b. ʻAbd Allāh, *al-Marqaba al-ʻulyā fī-man yastaḥiqq al-qaḍā' wa-l-fatyā*, ed. by Maryam Qāsim Tawīl, Beirut, 1995.

*Mu'jam* : Ibn al-Abbār, *al-Mu'jam fī aṣḥāb al-qāḍī al-imām Abī ʻAlī al-Ṣadafī*, ed. by Bashar ʻAwad Maʻrouf, Tunis, 2011.

*Takmila* : Ibn al-Abbār, *al-Takmila li-kitāb al-ṣila*, in *al-Ṣila ma'a al-Takmila li-kitāb al-ṣila wa Ṣila al-ṣila*, ed. by Jalāl al-Asyūṭī, vols. 3-5 in 6vols., Beirut, 2008.

*Ṣila* : *Ibn* Bashkuwāl, *Kitāb al-ṣila*, ed. by Ibrāhīm al-Abyārī, 3vols., Cairo/ Beirut, 1989.

*Dhayl B* : Ibn al-Najjār, *Dhayl ta'rīkh Baghdād*, ed. by Muṣṭafā ʻAbd al-Qādir ʻAṭā, 3vols., Beirut, 1997.

*Jadhwa* : Ibn al-Qāḍī al-Miknāsī, *Jadhwat al-iqtibās fī dhikr man ḥalla min al-aʻlām madīnat Fās*, 2vols., Rabat, 1973-1974.

*Ghunya* : ʻIyāḍ b. Mūsā, *al-Ghunya*, ed. by Muḥammad b. ʻAbd al-Karīm, Tunis, 1979.

*Tartīb* : ʻIyāḍ b. Mūsā, *Tartīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-maʻrifat aʻlām madhhab Mālik*, ed. by Saʻīd Aḥmad Aʻrāb et al., 8vols., Rabat, 1983 (2nd ed.).

*Dhayl* : al-Marrākushī, Ibn ʻAbd al-Malik, *al-Dhayl wa-l-takmila li-kitābay al-Mawsūl wa-l-Ṣila*, ed. by Iḥsān ʻAbbās et al., 6vols., Tunis, 2012.

*Tashawwuf* : al-Tādilī, Ibn al-Zayyāt, *al-Tashawwuf ilā rijāl al-taṣawwuf wa akhbār Abī al-ʻAbbās al-Sabtī*, ed. by Aḥmad al-Tawfīq, Rabat, 1984.

*Mustafād* : al-Tamīmī, Muḥammad b. al-Qāsim, *al-Mustafād fī manāqib al-ʻubbād bi madīnat Fās wa mā yalī-hā min al-bilād*, ed. by Muḥammad al-Sharīf, 2vols., Tétouan, 2002.

（年代記、その他、著者名順）

*Tibyān* : ʻAbd Allāh b. Buluggīn, *Kitāb al-tibyān ʻan al-ḥāditha al-kā'ina bi-dawlat Banī Zīrī fī Gharnāṭa*, ed. by ʻAlī ʻUmar, Cairo, 2006; trans. by Amin T. Tibi, *The Tibyān: Memoirs of ʻAbd Aallāh b. Buluggīn Last Zīrid Amīr of Granada*, Leiden, 1986.

*Ḥulal* : Anonimous, *Kitāb al-ḥulal al-mawshīya fī dhikr al-akhbār al-Marrākushīya*, ed. Suhayl Zukkār et al., Casablanca, 1979.

*Masālik* : al-Bakrī, ʻAbd Allāh b. ʻAbd al-ʻAzīz, *al-Masālik wa-l-mamālik*, ed. by Jamāl Ṭaliba, 2vols., Beirut, 2003.

Rawḍ : Ibn Abī Zarʻ, *al-Anīs al-muṭrib bi-rawḍ al-qirṭās fī akhbār mulūk al-Maghrib wa ta'rīkh madīnat Fās*, ed. ʻAbd al-Wahhāb b. Manṣūr, Rabat, 1999.

*Bayān* : Ibn ʻIdhārī al-Marrākushī, *al-Bayān al-mughrib fī akhbār al-Andalus wa-l-Maghrib*, ed. by Iḥsān ʻAbbās et al., 4vols., Beirut, 1983 (2nd ed.).

*Mu'jib* : al-Marrākushī, ʻAbd al-Wāḥid, *al-Mu'jib fī talkhīṣ akhbār al-Maghrib*, ed. by Muḥammad Saʻīd al-ʻAryān, Casablanca, 1978 (7th ed.).

## 註

（1） Vincent Cornell, *Realm of the Saint: Power and Authority in Moroccan Sufism*, *Austin*, 1998, 23; 私市正年『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』白水社、二〇〇四年、三七頁。

（2） Ronald A. Messier, "Re-Thinking the Almoravids, Re-Thinking Ibn Khaldun", ed. Julia Clancy-Smith, *North Africa, Islam and the Mediterranean World: From the Almoravids to the Algerian War*, London, 2001, 66.

（3） 代表的な成果を挙げると、ウラマー研究では、Dominique Urvoy, *Le monde des ulémas andalous du V/XIe au VII/XIIIe siècle*, Geneva, 1978. ムラービト朝期アンダルスの司法行政研究については、Racid El Hour, *La administración judicial almoravide en al-Andalus: Élites, negociaciones y enfrentamientos*, Helsinki, 2006. また、スペイン国立の総合研究機関である学術研究高等評議会（Consejo Superior de Investigaciones Científicas）下のアラブ学部門から『アンダルス人名伝記研究 *Estudios onomástico-biográficos de al-Andalus*』というシリーズが刊行されており、ムラービト朝期のウラマー研究も多く含む（これまで一八巻が既刊）。

（4） マグリブ出身者を具体的に挙げる研究もわずかにある。イブン・ビーヤはムラービト朝期のウラマーの政治的な影響力を検討するが、ウラマーの出身地に注目していない。Muḥammad Ibn Bīya , *al-Athar al-siyāsī li-l-ʻulamā' fī ʻaṣr al-murābiṭīn*, Judda, 2000. ハーフィディーは、マグリブ出身者の具体的な名を挙げるがアリー・ブン・ユースフ期（位一一〇六―一一四三年）を対象とする。Ḥasan Ḥāfiḍī ʻAlawī, *al-Murābiṭūn: al-Dawla, al-iqtiṣād, al-mujtamaʻ*, Rabat, 2007, 9-39.

（5） 本節については以下も参照のこと。Abdallah Laroui, *L'histoire du Maghreb: Un essai de synthèse*, Casablanca, 2011 (3ème éd.), 103-122; Jamil M. Abun-Nasr, *A History of the Maghrib in the Islamic Period*, Cambridge, 1987, 26-75; 私市『北アフリカ・イスラーム主義運動の歴史』一九―三六頁。

(6) *Rawḍ*, *162-163*. cf. J. F. P. Hopkins, *Medieval Muslim Government in Barbary until sixth century of the Hijra*, Bristol, 1958, 29; Vincent Lagardère, *Les Almoravides: Jusqu'au règne de Yūsuf b. Tāšfīn (1039-1106)*, Paris, 1989, 34-41.

(7) Cornell, *Realm of the Saint*, 33.

(8) *Ḥulal*, 19-20; *Masālik*, II, 351-352; *Rawḍ*, 154-156; *Bayān*, IV, 7-8. ヤフヤー・ブン・イブラーヒームとアブー・イムラーン・アルファースィーが出会った年には諸説があり、*Bayān* や *Ḥulal* では一〇四八・九年とあるが、ここでは *Bayān* の校訂者アッバースによる註に従う（*Bayān*, IV, 7n）。ムラービト運動については以下の政治史も参照。Jacinto Bosch Vilá, *Los almoravides, prólogo de Emilio Molina López*, Granada, 1990; Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*.

(9) *Tarīb*, VIII, 81; *Tashawwuf*, 89-92. 没年は一〇五三・四年とする研究もある（*Tashawwuf*, 89n）。

(10) *Masālik*, II, 356-357; *Rawḍ*, 168-169; *Bayān*, IV, 16-17; *Tarīb*, VIII, 81-83. cf. El Hour, *La administración judicial almorávide*, 187-188. 彼の教えは、支持者を得る一方で部族民の反発も買ったようである。*Masālik*、*Bayān* は上記の規律とともに、イブン・ヤースィーンの無知を示す逸話を伝える。ただし、*Tarīb* によると、イブン・ヤースィーンの出したファトワー及び法的な返答はムラービトゥーンのシャイフ（族長）たちに記憶されたという。

(11) ムラービトゥーンおよび王朝の語源となったリバートの解釈や場所について、モラエス・ファリアス Moraes Farias はクルアーンに由来するジハード思想から来ているとし、リバートの場所をモーリタニア沿岸にあるティドラ Tīdra 島とした。ただし、モラエス・ファリアス以降もこの議論は継続し、『イスラーム百科事典』では、地名や建物というより比喩的な意味として捉えるべきだとしている。Paulo Fernando de Moraes Farias, "The Almoravids: Some Questions Concerning the Character of the Movement during Its Periods of Closest Contact with the Western Sudan", *Bulletin de l'I. F. A. N.* 29, Sér. B, Nos. 3-4, 1967, 794-878; H. T. Norris and P. Chalmeta, "AL-MURĀBIṬŪN", *The Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Leiden, 1955-2005, 7:583-591.

(12) *Ḥulal*, 21-23; *Masālik*, II, 353-354; *Rawḍ*, 160-162; *Bayān*, IV, 13-14. cf. Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 61-72.

(13) *Ḥulal*, 21; *Rawḍ*, 160; *Bayān*, IV, 12. cf. Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 57-58.

(14) 七〇名の法学者について、*Ḥulal* は法学者の師（shaykh）とし（*Ḥulal*, 20-21）、*Bayān* は大人と若者の法学者としている（*Bayān*, IV, 8）。

(15) *Ḥulal*, 20-21; *Rawḍ*, 161; *Bayān*, IV, 8-10. なお、*Ṣila* ではアリー・ブン・アフマド ʿAlī b. Aḥmad al-Rabaʿī（一一三六・七年没）が伝えたハディースには、アリー・ブン・アフマドから四世代前にイブン・ヤースィーンを含むイスナード（伝承経路）が書かれるが、イブン・ヤースィーン

の師、弟子共に特定できなかった（*Ṣila*, II, 628）。

(16) *Tarīb*, VIII, 80. cf. Bosch Vilá, *Los Almorávides*, 93; El Hour, *La administración judicial almorávide*, 188; Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 71-72. スライマーンの父の名前については、史料およびローマ字転写で異同があり、アッドゥー Addū、ハッドゥー Ḥaddū ともされる。筆者はより時代が近いイヤードの著作のラバト版（第二版、一九八三年出版）を参照し、これに従った。なお、これより古いベイルート版（一九六七年出版）では、スライマーンと兄弟のアブー・アルカースィムの二人の父の名は ʿAdhrā であり、またこの二人がイブン・ヤースィーン後の指導者（qāʾimayn）とされている（ʿIyāḍ b. Mūsā, *Tarīb al-madārik wa taqrīb al-masālik li-maʿrifat aʿlām madhhab Mālik*, ed. by Aḥmad Bakīr Maḥmūd, 3vols., Beirut, 1967, III, 780）。

(17) *Ṣila*, III, 873-874; *Ghunya*, 282-283; *Tashawwuf*, 105-106. ただし、ムラーディーについて独立した項目を立てているのは、*Ṣila* のみである。

(18) al-Murādī, Muḥammad b. al-Ḥasan al-Ḥaḍramī, *Kitāb al-siyāsa au al-ishāra fī tadbīr al-imāra*, ed. by Muḥammad Ḥasan Muḥammad Ḥasan Ismāʿīl, Beirut, 2003.

(19) Maribel Fierro, "La religión", María Jesús Viguera Molíns et al., *Historia de España: Fundada por Ramón Menéndez Pidal*, VIII-II, Madrid, 1997, 437-439, 452; Walad al-Ḥusayn al-Nānī, *Ṣaḥrāʾ al-mulaththamīn: Dirāsa li-tārīkh Mūrītāniyā wa tafā ʿul-hā ma ʿa muḥīṭ-hā al-iqlīmī khilāl al-ʿaṣr al-wasīṭ*, Beirut, 2007, 241-249, 370-381.

(20) *Ṣila*, III, 978; *Ghunya*, 282-283; *Tashawwuf*, 105-108. cf. al-Nānī, *Ṣaḥrāʾ al-mulaththamīn*, 374; 私市正年『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』山川出版社、二〇〇九年、一五八頁。

(21) *Muʿjam*, 353; *Takmila*, V, 88.

(22) *Ḥulal*, 23; *Masālik*, II, 354-356; *Rawḍ*, 161-164, 167-168; *Bayān*, IV, 15-16.

(23) 宗教指導者イブン・ヤースィーンとアブー・バクルまでのベルベル諸部族の長、およびユースフ・ブン・ターシュフィーン以降のムラービト朝君主の権力構造については、拙稿「ムラービト朝におけるバイアの変遷と統治の正当化」『東洋学報』九六―四、二〇一五年、一―二六頁、特に二―五頁を参照。

(24) *Ḥulal*, 24-26, 28; *Rawḍ*, 176-181; *Bayān*, IV, 26-30. なお、ムラービト朝によるマグリブ各地域の征服およびその年代は史料によって異なり、特に、*Ḥulal*、*Bayān* がほぼ同様の情報を伝え、*Rawḍ* が独自かつ最も詳細な情報を伝えている。ただし、王朝の詳細な政治史を著したラガルデール Lagardère は征服地や年代を特定した際、*Ḥulal*、*Bayān* の情報を採用し、*Rawḍ* の情報については否定的な見方をし、基本的に採用していない。本稿も史料を検討したうえでラガルデールに従うが、その場合イブン・ヤースィーン

の死からアブー・バクルの結婚までの約一〇年は言及がない。cf. Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 61-101.

(25) *Bayān*, IV, 26-27.

(26) *Bayān*, IV, 28. フェスの征服年と当時の支配者名については、史料により相違がある。*Bayān* と *Ḥulal* の情報は類似し、共に一〇七五年を征服とするが、支配者については、*Bayān* はフトゥーフとドゥーナースを兄弟とする。*Ḥulal* は両者を親子とし、フトゥーフをマグラーワ族のズィーリー・ブン・アティーヤ Zīrī b. ʻAṭīya（一〇〇一年没）の子孫だとしている。*Ḥulal*, 28; *Rawḍ*, 141-144, 176-177; *Bayān*, IV, 28. cf. Ibn al-Khaṭīb, *Aʻmāl al-aʻlām fī-man bāyiʻa qabla al-iḥtilām min mulūk al-Islām wa-mā yata ʻallaqu bi-dhālika min al-kalām*, ed. by Sayyid Kasrūwī Ḥasan, 2vols. in 1, Beirut, 2003, 388; Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 91-93.

(27) *Rawḍ*, 179.

(28) *Bayān*, IV, 29.

(29) *Bayān*, IV, 30.

(30) *Rawḍ*, 180-181.

(31) Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 99-101.

(32) *Bayān*, IV, 22.

(33) *Rawḍ*, 180.

(34) *Ḥulal*, 33. cf. Lagardère, *Les Almoravides (1039-1106)*, 97-99.

(35) 本節では没年が不明な者は、特定の場合を除き対象とはしなかった。*Tarīb* では、没年が書かれないことがあるが、記事内容から第一一世代のマグリブ出身者の多くは対象年代の者たちと考えられ、すべて採用することとした。また、伝記集では、項目として立てられているウラマーの親族の情報が書かれることもあるが、独立の項目として立てられていない場合は表に入れていない。

(36) 軍隊を構成するベルベルのムラービトゥーンに関しては、ラガルデールがユースフ・ブン・ターシュフィーン期の軍隊構成を検討し、六四名を列挙している。Vincent Lagardère, “Esquisse de l’organisation militaire des Murabitun, à l’époque de Yusuf b. Tasfin, 430 H/1039 à 500 H/1106”, *Revue de l’Occident musulman et de la Méditerranée* 27, 1979, 99-114.

(37) 谷口淳一「人物を伝える—アラビア語伝記文学」林佳世子、桝屋友子編『記録と表象　史料が語るイスラーム世界』、東京大学出版会、二〇〇五年、一三四—一三六頁。森山央朗による伝記記事の一二項目の分類も参照。森山央朗「『地方史人名録』伝記記事の特徴と性格—中世イスラーム世界のウラマーが編んだ地域別人物記録の意図—」『東洋学報』九〇—四、二〇〇九年、二七—五四頁。

(38) Camilo Gómez-Rivas, *Law and the Islamization of Morocco under the Almoravids: The Fatwās of Ibn Rushd al-Jadd to the Far Maghrib*, Leiden, 2014, 30.

(39) 森山「『地方史人名録』伝記記事の特徴と性格」四五

—四六頁。

(40) ユルボワ Urvoy はアンダルスのウラマーについて、修得した学問や師弟関係などの学問状況を年代ごとに示しており、当時の学問修得の傾向を知る上で参考になる。註(3)参照。

(41) Cornell, *Realm of the Saint*, 3-31; 私市『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』二一、二三頁。マグリブにおけるスーフィズムの到来は一一世紀初めであり、マシュリクより二世紀半、アンダルスより一世紀ほど遅れていた。また、他のスーフィーの例としては、モロッコを征服したアラブ戦士（mujāhidūn）や部族の名祖がいる。

(42) 当時、マグリブとアンダルスの両地域にはマシュリクに存在するようなマドラサ（ウラマーを育成する高等教育施設）は設立されていなかった。マグリブにおいて最初にマドラサが設立されるのは、マリーン朝期の一二七一・二年のこととされている。Maya Shatzmiller, *The Berbers and the Islamic State: The Marinid Experience in Pre-protectorate Morocco*, Princeton, 2000, 90.

(43) *Takmila*, IV, 57. Muḥammad b. Ibāhīm al-Lakhmī（一一九一年没）。なお、小野仁美によると、マーリク派は初期からクルアーン教師に報酬を支払って雇用することを有効とする見解を採用していたという。小野仁美「マーリク派法学における子どものクルアーン教育：イスラーム法規定と教育専門書」『イスラム世界』七〇、二〇〇八年、六一—八九頁。

(44) El Hour, *La administración judicial almoravide*, 273-276.

(45) ユースフ・ブン・ターシュフィーン期以降のマグリブ出身者の就任地としては、さらにトレムセン、アンダルスのセビーリャ、アルメリアが加わる。アンダルス出身者によるマグリブでの就任地としては、アグマート、マラケシュ、セウタ、フェスが挙げられる。cf. El Hour, *La administración judicial almoravide*, 129-130.

(46) J. F. P. Hopkins, *Medieval Muslim Government in Barbary*, 136, 143.

(47) カーディーの任免の状況は、アンダルスでも同様であったと思われる。エルフールは、具体例は示していないものの、アンダルス征服以前のマグリブの対応をアンダルスにも適用したと指摘している。Racid El Hour, "The Andalusian Qāḍī in the Almoravid Period: Political and Judicial Authority", *Studia Islamica* 90, 2000, 80.

(48) Lagardère, *Les Almoravides: Le djihâd andalou (1106-1143)*, Paris, 1998, 245-298.

(49) 生活の糧に関して、*Rawḍ*, 173。マッラークシーに関して、*Muʿjib*, 252-253。ラルイ Larouï、アブン・ナスル Abun-Nasr はともに著名なマグリブ通史において、シューラー等に参加した君主に近い法学者は俸給を得ていたとする。Laroui, *L'histoire du Maghreb*, 153; Abun-Nasr, *A History of the Maghrib*, 83.

(50) 当時、アンダルスは各地にムスリム諸王朝が乱立した状態にありターイファ諸国（Mulūk al-ṭawā'if）とよばれる（一〇三一―一〇九〇年）。この中では、セビーリャのアッバード朝が強大だったが、それぞれの王は合従連衡を繰り返し、キリスト教徒諸国と同盟を結ぶ王も現れた。こうした状況を批判する法学者や民衆の要求をうけ、ターイファ諸王はムラービト朝に救援を要請した。ムラービト朝はこれに応じて一〇八六年と八八年に軍を派遣したが、一〇九〇年以降はターイファ諸国の征服に転じた。

(51) *Takmila* におけるユース・ブン・イーサーの記述より。表一（no.22）参照。イブン・サマドゥーンについては次節（五）で詳述する。なお、*Dhayl* によると、ベルベル諸部族の長であるアブー・バクルの死の知らせがサハラから届いたとき、ユースフ・ブン・イーサーはユースフ・ブン・ターシュフィーンに対し、君主の位（imāra）の契約を結んだ（'aqada）という。その後の部分は校訂者による補遺であるものの、ラムトゥーナ族の司令官（'umarā'）と、彼らと共にいたマグリブ軍の残りがユースフ・ブン・ターシュフィーンにバイア（bay'a、忠誠の誓い）を行ったとされている。補遺の通りであると、ユースフ・ブン・イーサーはユースフ・ブン・ターシュフィーンへのバイアを先導するきわめて重要な者だったといえる。*Dhayl*, V, 347-349. cf. 'Izz al-Dīn Jasūs, *al-Mujtama' al-siyāsī wa nasaq tadāwul al-sulṭa bi-l-maghrib: al-Dawla al-murābiṭīya namūdhajan*, Rabat, 2014, 42-48.

(52) ただし、アティーク・ブン・イムラーンはこの書簡をもっていたために、バグダードからの帰途、アレクサンドリアでファーティマ朝の軍司令官によって殺害されたという（一〇九一・二年）。表一（no.19）参照。cf. Georges Vajda, "L'aventure tragique d'un cadi maghrébin en Égypte fāṭimide", *Arabica* 15-1, 1968, 1-5.

(53) *Takmila* はこの戦いで多くの著名な者（'alam）や禁欲者（zāhid）が殉教したとし、他に Abū al-'Abbās b. Zumayla、Abū Rāfi' al-Faḍl b. Abī Muḥammad b. Ḥazm、Abū Sālim al-'Irāqī の名を挙げる（*Takmila*, V, 291）。

(54) 私市『マグリブ中世社会とイスラーム聖者崇拝』三二―三三頁。

(55) ユースフ・ブン・ターシュフィーン期の税制については *Rawḍ*, 173 を参照。cf. Laroui , *L'histoire du Maghreb*, 154.

(56) *Tibyān*, 146, 149, 178; *Marqaba*, 127-129; *Ṣila*, II, 635-636; *Tarīb*, VIII, 182-183.

(57) Pierre Guichard, *Al-Andalus 711-1492 : Une histoire de l'Espagne musulmane*, Paris, 2000, 154.

(58) *Ṣila*, III, 798-800; *Tarīb*, VIII, 131-134.

(59) *Ṣila*, III, 959-960; *Tarīb*, VIII, 160-161.

(60) ユルボワによると、イブン・アッターブはヒジュラ暦五〇〇年―五二五年の間に、師としてあげられた回数が最も多い六人の内の一人とされる。Urvoy, *Le monde des*

*ulémas andalous*, 95-99.

(61) *Sila*, I, 124-125; *Tartīb*, VIII, 161.

(62) *Ghunya*, 191; *Tartīb*, VIII, 199.

(63) *Ghunya*, 215-216; *Tartīb*, VIII, 202.

(64) *Sila*, III, 870-871; *Tartīb*, VIII, 112-113; *Tashawwuf*, 83-85.

(65) Cornell, *Realm of the Saint*, 16.

(66) *Tibyān*, 183, 188.

（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）

表一　ユースフ期のマグリブ出身ウラマー

| no. | ①名前 | ②没年 | ③出身 | ④役職 | ⑤師 | ⑥弟子 | ⑦学問 | ⑧旅 | ⑨逸話・支配者との関係 | ⑩史料 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | Sa‘īd b. Ibrāhīm al-Sabtī | | セウタ | | 3 | | F, H | I, Msh | 名家、商人 | Tr8-169 |
| 2 | Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Hamdānī | | セウタ | Kh, Q（セウタ、マラケシュ） | 3 | | F | A, H, Msh | 名家<br>ミフナを受けマラガやバーディスに移る | Tr8-170 |
| 3 | Ḥasan b. Yakhlif al-Anṣārī | | セウタ | | 1 | | F | | 商人<br>バルガワータ族の支配から逃れる | Tr8-171 |
| 4 | Ḥasan b. Khālid al-Zubaydī | | セウタ | Kh, Md, S | 1 | | F, Q, H | I, Msh | 禁欲的 | Tr8-172 |
| 5 | Muḥammad b. Mas‘ūd al-‘Akkī | | セウタ | Kh, S | 1 | 有 | A，F，H，N | | 禁欲的<br>スルターンがマジュリスに出席する | Tr8-172 |
| 6 | Ḥasan b. Muḥammad al-Qaysī | | セウタ | Mf | 3 | | F, H | | ファトワーの長<br>バルガワータ族の下で地位有り。その後離反する | Tr8-173 |
| 7 | Muḥammad b. ‘Abd al-Raḥmān al-Kutāmī | | セウタ | Kh, Md, Mf, Q（フェス） | 5 | 2 | F | H, I | 名家<br>間違ったフトバを行い投獄される<br>君主によるカーディー任命<br>フェスの人々にズボンをはかせる | J1-252, Tr8-174 |
| 8 | Ismā‘īl b. Yarbū‘ al-Qaysī | | セウタ | | | | A, F, H, S | H, Msh | ムラービトゥーンとともに過ごす<br>ウスール（法源学）が不完全 | Tr8-175 |
| 9 | Ḥudūr b. Futūḥ al-Zanātī | | セウタ | | 3 | | F | A, Mgh | 商人 | Tr8-179 |
| 10 | Muḥammad b. Khalaf al-Tamīmī | | セウタ | Mf | 2 | | F, H | | 晩年ミフナを受け、ファトワーの発行を禁止される | Tr8-180 |
| 11 | Sa‘īd Ibn Ḥanīn | 1070･1 | フェス | | | | F, S | | 名家、法学者、詩人 | J2-518 |
| 12 | ‘Abd Allāh b. Ibrāhīm al-Sabtī | 1077･8 | セウタ | | | 1 | F, K | A, H, Msh | 名家<br>バルガワータ族の支配者に媚びない | S2-451, Tr8-169 |
| 13 | ‘Abd Allāh b. Ḥamw al-Lawātī | 1080･1 | セウタ | A, Md | 1 | 7 | F, H | Mgh | バルガワータ族の下でアフカームに就く<br>ムラービト軍征服時に指導権をもつ | S2-451, Tr8-173 |
| 14 | ‘Abd al-Malik al-Maṣmūdī | 1086 | 部族 | Q（マラケシュ） | | | | A | 最初期のマラケシュのカーディー<br>ザッラーカの戦いで殉教 | Tk5-16 |
| 15 | Ya‘lā b. al-Maṣmūdī | 1086 | 部族 | Q（マグリブ） | | | F | A | no.14 とともにザッラーカの戦いで殉教 | Tk5-291 |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 16 | ‘Abbūd b. Sa‘īd al-Tanūkhī | 1087・8 | セウタ | Kh, Q（セウタ） | 4 | | F, H, Q | | 商人<br>君主によるカーディー任命(no.22の推薦) | Tr8-197 |
| 17 | Ḥajjāj b. Qāsim al-Ma’mūnī | 1087-9 | セウタ | | 4 | 4 | F, H | A, H, Msh | アルメリアに住む<br>法学の討論で指導権と名声を得る | (S1-246), Tr8-176 |
| 18 | Muḥammad b. ‘Alī/Ya‘lā al-Ma‘āfirī | 1091 | セウタ | | 7 | 1 | B，H，K，Q, S | A, I | | S3-872 |
| 19 | ‘Atīq b. ‘Imrān al-Raba‘ī | 1091・2 | セウタ | Q（セウタ） | 3 | | H | A, M | 君主に同行した<br>アッバース朝カリフの書簡を持ち帰る<br>途中、アレクサンドリアで殺される | DhB2-131, Tk5-145 |
| 20 | ‘Abd Allāh b. ‘Alī/Ya‘lā al-Ma‘āfirī | 1093 | セウタ | | 3 | | B，F，H，N, W | A | | S2-453 |
| 21 | al-‘Izz b. Muḥammad | 1095 | マグリブ | | 1 | | A, L | A | | S2-660 |
| 22 | Marwān b. ‘Abd al-Malik al-Lawātī | 1097・8 | タンジェ | A, Kh, Mf, Q（タンジェ）, S | 6 | 5 | A，F，L，N, Q, S | H, Msh | 名家、マグリブの指導者（zaʿīm）<br>セウタのカーディーを求められるが辞退<br>マグリブとアンダルスの諸事が持ち込まれ、君主が委任する | G258, Tk4-162, Tr8-177 |
| 23 | Yūsuf b. ‘Īsā al-Azdī | 1099 | フェス | Mf, Q（フェス、メクネス、マラケシュ） | 3 | 1 | A, F, H, T | A | ザナータ族、ムラービト朝期のカーディー<br>君主によるカーディー任命<br>君主の位（imāra）の契約を結んだ<br>君主と共にアンダルスにガザーを行う<br>自身とイブン・サアドゥーンの考えによってアンダルスの諸王の廃位等を行う<br>ファトワーの長 | Dh5-347, J2-549, Tk5-281 |
| 24 | ‘Abd al-Raḥmān Ibn Abī Mulūk al-Qaysī | 1099・100 | フェス | | | | | | 法学者 | J2-390 |
| 25 | Mūsā b. Sulaymān al-Lakhmī | 1100・1 | マグリブ | | 1 | 有 | Q | A | アルメリアに住む | S3-884 |
| 26 | Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Mūrūrī | 1106・7 | セウタ | | | 1 | Q | | | G159 |
| 27 | al-Ḥasan b. ‘Alī al-Tāhartī | 1108 | セウタ | | 8 | 有 | A, H, N | A | | G204, M101 |
| 28 | ‘Abd Allāh b. Aḥmad al-Tamīmī | 1108 | セウタ | | 5 | 有 | H | H, Msh | | G220 |

| | | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 29 | ‘Abd al-Raḥmān b. Muḥammad al-Ma‘āfirī | 1108 | セウタ | Kh, Md, Q（セウタ 2 回、アルヘシーラス）, S | 3 | 2 | A, F, K | A, H, I, Msh | スーフィー<br>法学は弱い | G226, Tk4-313, Tr8-198 |
| 30 | ‘Alī b. al-Qāsim al-Fanzālī | 1108・9 | サレ | Q（サレ） | | | S | A, H, Msh | 指導権<br>戦士としてアンダルスに入る | Dh5-15, Tk5-121 |
| 31 | Ya‘alā, Abū Jabal | 1109・10 | フェス | | 1 | | F, Q | H, Msh | 聖者（walī, ṣāliḥ） | J2-560, Tsh101 |
| 32 | Muḥammad b. ‘Īsā al-Tamīmī | 1109-12 | セウタ | Kh, Q（セウタ、フェス）, Sh | 10 | 8 | F, H | A | バルガワータ族支配下のシューラーに参加する<br>ムフティーの長<br>セウタのモスク建設・増築<br>フェスのカーディーを拒否し投獄される | G99, J1-252, 253, M133, S3-874, Tr8-199 |
| 33 | Ṣāliḥ b. Muḥammad Ibn Ḥirzihim | （1111・2 以降） | フェス | S | 1 | | | Msh | 聖者（walī） | Tsh94 |
| 34 | ‘Abd Allāh b. Sa‘īd al-Wajdī | 1116・7 以前 | ウジュダ | Q（バレンシア） | | 3 | F, H | A | バレンシア征服直後のカーディー<br>バレンシアのモスクのミフラーブ建設 | Tk4-267 |
| 35 | Muḥammad b. ‘Abd Allāh al-Umawī | 1123 または 1126・7 | セウタ | Mf, Q（セウタ 2 回）, Sh | 5 | 8 | F, H, Q | | セウタの長になる（ra’asa）<br>バルガワータ族、ムラービト朝期のカーディー<br>文法、言語に関する知識なし | G125, Tr8-196 |
| 36 | ‘Abd Allāh b. ‘Alī al-Lawātī | 1129・30 | タンジェ | Q（アルヘシーラス、グラナダ、トレムセン） | 8 | | | A | 君主によるカーディー任命<br>アリー軍に入りタラベーラの戦いに参加 | Tk4-268 (Tr8-178) |

【凡例】　④役職　A: アフカーム、Kh: 説教師、Md: 教師、Mf: ムフティー、Q: カーディー、Khq: カーディー代理、S: 礼拝の導師、Sh: 諮問される者（＝ムシャーワル）
⑦学問　A: アダブ（文芸）、B: 修辞、F: 法学、H: ハディース、K: 神学、L: 言語、N: 文法、Q: クルアーン、S: 詩、T: 記録作成、W: 文書作成
⑧旅（行き先）　A: アンダルス、H: 巡礼、I: イフリーキヤ、Mgh: マグリブ、Msh: マシュリク
⑩史料略号　Dh: *Dhayl*, DhB: *Dhayl ta’rīkh Baghdād*, G: *Ghunya*, J: Jadhwa, M: *Mu‘jam*, S: *Ṣila*, Tk: *Takmila*, Tr: *Tartib*, Tsh: *Tashawwuf*
没年順。なお、名前は簡略化するため、本人の名と父の名とニスバにとどめた。師・弟子欄にはそれぞれ記載された人数を示した。複数史料に記載がある場合は、最も多い人数を採用した。史料欄には史料略号（および巻号）と被記載者の記述の最初のページ数を示した。例　Tr8-168: *Tartīb*, VIII, 168.

表二　セウタの歴代カーディー

| | 名前 | 就任時期 | 表一番号または典拠 |
|---|---|---|---|
| 1 | ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ | バルガワータ族の時代 | no.35 |
| 2 | アッブード・ブン・サイード | 没する（1087・8 年頃）まで。ユースフ・ブン・ターシュフィーンによる任命 | no.16 |
| 3 | ムハンマド・ブン・アブド・アッラーフ | 再任。ムラービト朝の最初の時代。 | no.35 |
| 4 | アブド・アッラフマーン・ブン・ムハンマド | 1091・2 年— | no.29 |
| 5 | ムハンマド・ブン・イーサー | 1096・7 — 1102 年 | no.32 |
| | もしくはイブラーヒーム・ブン・アフマド | 同上 | G191, Tr8-199 |
| 6 | アブド・アッラフマーン・ブン・ムハンマド | 再任。1102 — 1107 年 | no.29 |
| 7 | アブド・アッラーフ・ブン・ムハンマド | 1106・7 年以降— | G215, Tr8-202 |
| 8 | （不明） | | |
| 9 | イブラーヒーム・ブン・アフマド | 再任。1112・3 — 1115・6 年 | G191, Tr8-199 |
| 10 | （不明） | | |
| 11 | アブド・アッラーフ・ブン・ムハンマド | 再任。1118 — 1119 年 | G215, Tr8-202 |
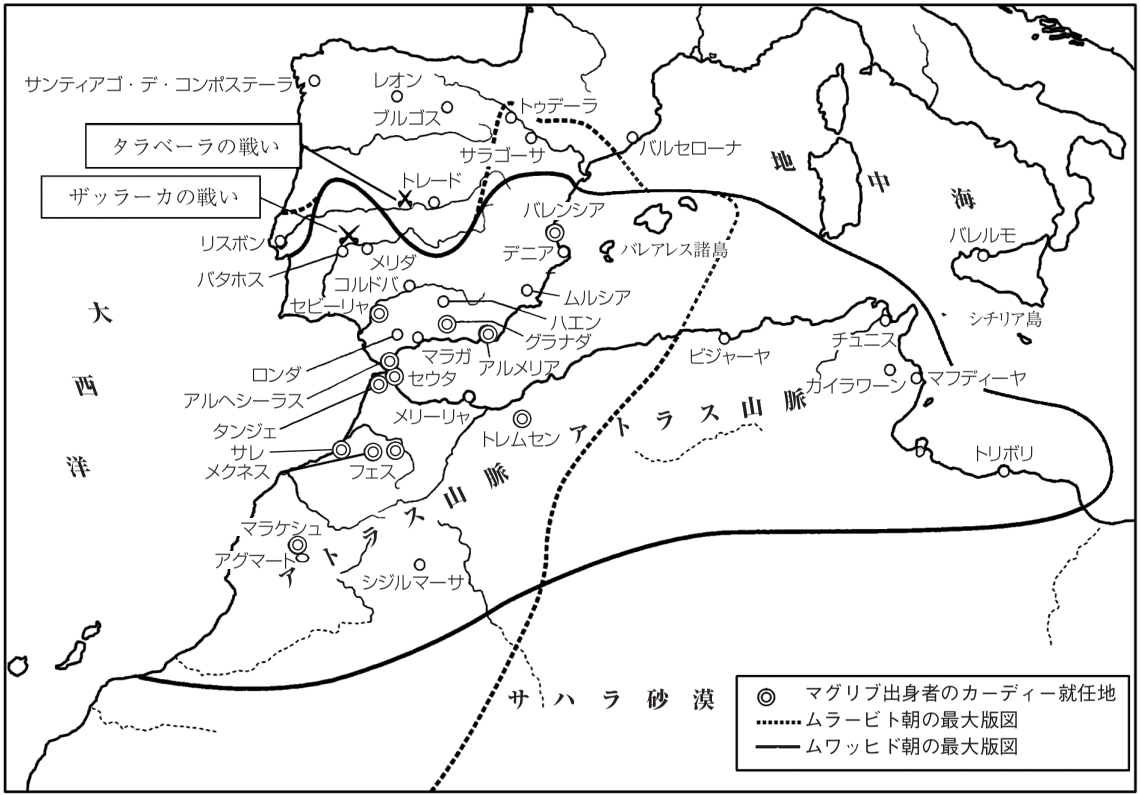
図　11-13 世紀のマグリブとアンダルス（関哲行他編『世界歴史体系　スペイン史１―古代～近世―』山川出版社、2008 年、107 頁に一部加筆）